

## 【書評】

## 農業気象ハンドブック

農林省振興局研究部監修 養賢堂発行 定価 880円 B 5版 600頁

内容は6章からなっていて、第1章は「農業気象に必要な気象の知識」である。この章には耕地上の風、乱流拡散現象、日射、水、熱、降水などの気象現象、さらに霜、灌漑水温、土壌、防風林などの具体的な事象について、物理的な理論を中心として微気象的に解説されている。一般にはやや難解とも思われるが、戦後農業気象の分野において、飛躍的に発展した農業物理的な分野を概観するには、きわめてよくまとめられている。またこの章の最後には「気候の知識」として、気候の指数や分類などが、大気候的な観点から記されている。

第2章は「農業気象の調査法」で、一般の気象観測、局地の気象観測、微気象観測の方法が記され、さらに観測結果の整理方法について、具体的に述べられている。

第3章は「農業と気候」で、大気候的な農業気候区分と各地方の農業気候の特性を概観し、局地気候、微気候の特性とその利用が、具体的な栽培管理や園芸上の促成栽培などを中心として記載されている。

第4章は「農業気象災害」で、各種の農業気象災害の発生の機構と防ぎ方が述べられている。

第5章は、「農業予想と天候」で、天候予想の概況と利用・収量の予想・災害の予想・病虫害発生予想が述べられている。

第6章は「農業と気象」で、各種の作物・野菜・花類・病虫害について、それぞれ気象との関係が記述的に描かれている。さらに養蚕・家畜・土壌微生物・農家の生活にまでわたって、気象との関連事項が拾い上げられている。

巻末には主要公式集・計量単位換算率表・常数表・気象常用表・各地の月別気候表が収録されている。

農業気象のような、農業と気象との間に横たわる境界的な学問の分野にあっては、そのどちらの側に重点をおくかによって、いつも2つの見方が存在する。このような観点に立ってこの本をみると、第1章は物理の目をもって農業の環境をとらえたものであり、第3章以下は農業の分野に立ってその環境を眺めたということが出来るだろう。

従来農業気象というのは、気象的な立場から、または物理的な立場から、これを眺めたものが多かったし、そのために、実際の農業はある抽象化されたものとなって、農業の分野からは、はなはだ食い足りない感じのするものが多かった。この本はその点従来になかった農業的な視野からその環境を把らえようとする努力がなされており、従来の間隙をかなりまで埋めているように思う。

わが国で農業気象が組織的にとり上げられてから、ほぼ20年になる。この20年の間農業気象は気象の分野においても農業の分野においても、つねに傍系的な存在として取り扱われてきた。しかしいまこの600頁に盛り込まれたいろいろな成果のあとを顧るにつけても、農業気象の分野を歩みつづけた人達の地味な努力が、ようやく実を結んだとの感を深くする。

しかしそれは実を結んだとはいえ、決して完成されたことは意味しない。将来の発展における一里塚でしかないようにも思われる。この本を開けば、ある面ではかなり充実した内容をもっているが、ある面ではほとんど常識的な記述の段階でしかない分野もある。「本書の編集に当って」の中で述べられているように、第5章や第6章には、今後の研究にまつべき多くの問題がある。また現在のシノブチックな気象学と農業との関連についても、その間の間隙は将来埋められなければならない分野であろう。

気象関係者は天気予報を当てることにいままでは精一杯であった。しかしただ「空」だけを眺めていたのでは気象の利用は発展しない。足もとの「地」をみて、「空」と「地」との関連において今後は気象事業も発展しなければならない段階にきているように思う。この意味において「地」から発展してきた農業気象というものの今日の姿を、この本においてよく眺めてもらいたい。気象関係者に広くこの本をお勧めするゆえんである。

なおこの本は内容の豊富さに比較して、まことに廉価であり、書肆の出版の良心的であることを付記する。

(荒井 隆夫)